テオプラストス

植物誌 1

西洋古典叢書

始原的要素と構成要素

三　植物の水分は目に見えやすい。そこで、ある人々はすべての植物の水分を単純に液汁[1]と呼ぶ。[かつて]メネストル[2]もそうであった。他方、その他の植物の水分には特別の名をつけないが、植物によって、ある場合は「液汁（オポス）」、ある場合は「涙[樹液][3]」と呼ぶ人々もいる。植物の腺維や血管[4]にはそれ自体の名称がないので、動物の構成要素（モリオン）でそれに類似するもの[5]の名を借用する。しかし、おそらくは、これらの構成要素に限らず、植物の類[6]全体も、[動物界との]相違を他にもいろいろもっているであろう。植物界は前述の通り多様[7]だからである。ところで、われわれはより良く知られていることを手がかりにして、未知のことを探求しなければならないのだが、より重要で、感覚的にもはっきり認められる特徴ほど良く知られているのだから、そのようなものについて、すでに示した方針に従って、論じていくべきなのは明らかであろう。

四　ほかのもの[未知のもの]については、これらの[よく知られた]ことを参考にして、おのおのがどの程度、どういった類似性をもっているのかを考えていこう。植物の諸部分[とは何か]を把握したら、次に、諸部分の間に見られる相違点[8]を理解しなければならない。こうすることによって、部分の本質が明らかになり、同時に、類[9]相互の間に見られる差異全体も明らかになるからである。

さて、最も重要な部分――すなわち、根、茎などをいうのだが――の本質についてはすでにおおよそ話し

（1）原語「オポス（ὀπός）」は植物の液汁、樹液、またイチジクやケシの類の乳液を意味するが、ここでは一般的な「液汁」の意。

（2）メネストルは南イタリアのシュバリス出身のピュタゴラス派の植物学者。エンペドクレスとテオプラストスの間の時代の人で、テオプラストスの時代にはかなりの権威だったらしい。彼は動物を「熱いもの」と「冷たいもの」に二分するエンペドクレスの考え方を植物に適用した。すなわち、植物を「熱いもの」と「冷たいもの」とに二分して、個々の植物とその成長過程は熱と寒冷に対応するとし、本性が「熱い」植物は成長するのに「冷たい」気候を必要とするとみなした（『植物原因論』第一巻二一一五－七）。テオプラストスは植物を冷熱によって二分する方法を踏襲したが（第五巻三－四）、本性が「熱い」動物は熱の過剰を回避するために水中にすむというエンペドクレスの主張をアリストテレスが否定したように（『呼吸について』四七七ａ三三以下、『動物部分論』六四八ａ二五－二七）、テオプラストスはメネストルの「熱い動物は多産である」という主張をしりぞけている（『植物原因論』第一巻二二一一－七）（Amigues I, p. 73）。

（3）原語「ダクリュオン（δάκρυον）」は本来「涙」を意味するが、涙のように流れ落ちる「樹液」をも意味する。とくに「ゴム［ガム］」を指すことが多い。

（4）動物の部分の名として使われているので「腺維」と「血管」と訳した。以後、植物の部分の名として使われる場合には「繊維」、「脈管」と訳す。二〇頁註（1）参照。

（5）原語「ホモイオテース（ὁμοιότης）」は動物の部分との「類似」の意味。動物と植物との対応を想定しながらも、対応的類似（類比）を意味するアリストテレスの用語、「アナロギアー（ἀναλογία）」を使っていない。

（6）原語 τὸ τῶν φυτῶν γένος（植物のゲノス）は「植物の類、仲間」、すなわち「植物界」を意味し、「動物のゲノス」、いわゆる「動物界」に対比される。

（7）第一巻一－一〇参照。

（8）例えば、根のさまざまな種類（直根や塊状根、根とみなされていた鱗茎や塊茎など）に見られる違い。

（9）「類（ゲノス）」はアリストテレスが動物を分類するのに用いた用語で、テオプラストスも植物を分類する際に用いた。今日、植物学で「属」を示す genus はこの「ゲノス」に由来し、種 species の上位の分類群なのだが、テオプラストスは「属」と同じ意味で用いることも（第一巻一四－三、第三巻八－一など）、属よりも大きな分類群を指すこともある。また、単に、「エイドス」より上位の分類群を示す場合にも使われており、「エイドス」と「ゲノス」は必ずしも現代の用法の「種」と「属」に合致していない。必要に応じて、本文中に原音を付記する。

訳者略歴

小川洋子（おがわ　ようこ）

千里金蘭大学短期大学部非常勤講師

一九四三年　鹿児島県生まれ

一九七四年　東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学

主な著訳書

フィンレイ編著『西洋古代の奴隷制』（共訳、東京大学出版会）

クラウト編著『ロンドン歴史地図』（共訳、東京書籍）

ストライスグス『ギリシア』（国土社）

植物誌　1

二〇〇八年三月二十日　初版第一刷発行

西洋古典叢書　第Ⅳ期第8回配本

訳　者　小川洋子

発行者　加藤重樹

発行所　京都大学学術出版会

606-8305 京都市左京区吉田河原町一五-九 京大会館内

電話　〇七五-七六一-六一八二

FAX　〇七五-七六一-六一九〇

http://www.kyoto-up.or.jp/

印刷・土山印刷／製本・兼文堂

© Yoko Ogawa 2008, Printed in Japan.

ISBN978-4-87698-174-8

定価はカバーに表示してあります